

～ 子供に関わるすべての人へ～
家庭教育ニュースレター

家族の絆

2022年 秋 = Vol.63 =

Contents

- SNSの危険から子どもを守るため保護者が
できること
- 自己肯定感を体験する子は人生を豊かに生きる
- <GIGAスクール構想>
1人1台の端末は令和の学びの「スタンダード」
- あいさつでつながる
- 西宮市立図書館から本の紹介



バックナンバーはこちらからご覧いただけます↑

発行/西宮市教育委員会 問合せ先/地域学校協働課 TEL0798-35-3868



SNSの危険から子どもを 守るため保護者ができること



SNSは様々な情報を収集したり、コミュニケーションをとったりと大変便利なものです。一方で、使い方を誤ると、思いもよらない身の危険に晒される可能性があります。子どもをSNSの危険から守るために私たち大人ができることは何でしょうか。今回は、消費者教育の出前授業を行っており、消費生活センターで相談員も務めておられる小山千智さんにお聞きしました。

「1回顔が見えない人とTikTokでLINEのQRコードを交換した」(小5)・「ゲームで名前、住所を聞かれた」(小6)・「姉がネットの人と会っていた」(小6)・「LINEで知らない人が入ってきた」(小5)

これは私が行った出前授業で子ども達を書いたアンケートの一部です。

2020年TikTokで動画を投稿していた小5の女の子にわいせつ行為をした男が逮捕されました。男は「SNSで小さい子を探していた」と供述しています。女の子は動画を褒められ、アイコンが可愛いパンダだったので返信し、数回会った後、拒否すると「家の前で死ぬ」と脅され、被害にあいました。SNSで知り合った小1の子に裸の写真送らせる事件もありました。警視庁によるとSNSがきっかけの18歳未満の被害者は1年間で約1,800人。ネットの事件は、子どもたちの身近に迫っています。

ネットは包丁と同じです。包丁を子どもに渡すとき、怪我をしないよう最初は傍で見守るなど段階的に使わせるはず。ネットも使い方を間違えると、一生消えない傷を負う危険があります。包丁と同じように子どもが自分で安全に利用できるよう、段階的に導いていく必要があります。

SNSの利用には年齢制限があり、多くが13歳未満は利用不可です。またTikTokは、16歳までは、投稿は非表示、DMも送れないなどの制限があります。年齢制限を無視して使わせることは保護者の責任が問われま

す。13歳未満の場合、保護者のアカウントで子どもも利用するようにし、保護者が見守りながら使わせるのがおすすめです。

またSNSは設定でいろいろな制限ができます。例えばLINEでは「友だち以外からのメッセージを受信拒否」ができます。制限はあとから厳しくするのは難しいので、使い始める前に行うのが一番よいです。また、子どもが納得したうえで設定することも大切です。納得していないと、子どもは解除方法を探してきます。既に制限なしで使わせている場合は、どのような危険があるのか、なぜ制限が必要なのかを伝え、子どもからは制限が嫌な理由を聞き取り、安全な利用について話し合ってください。

きちんと設定しておくことは、子どもを危険から守るための保護者ができる対策です。設定をしておけば防げたのにと後悔しないために、ぜひ子どもと一緒に危険について話し合い、調べて設定してみてください。そして「何か困ったことがあればいつでも話してほしい」と伝えて下さい。

こやま ちさと
小山 千智

NPO法人C・キッズ・ネットワーク 会員

消費者教育の出前授業を行っており、消費生活センターで相談員としても勤務中。小学生・中学生姉妹の保護者

消費生活相談員資格(国家資格)、消費生活アドバイザー、ファイナンシャルプランニング技能士2級取得



自己肯定感を体験する子は人生を豊かに生きる

最近よく耳にする「自己肯定感」という言葉をご存知でしょうか。今回は、子育てをする上での「自己肯定感」の意味とその大切さについて、NPO法人ハートフルコミュニケーション 代表理事 菅原裕子さんにお話をいただきました。

目指すのは子どもの幸せな自立

人が一生を幸せに生きるためにはいくつもの要素があります。それらの要素を3つにまとめて、子どもの幸せな自立を目指して、子どもに「愛すること」「責任」「人の役に立つ喜び」を教えようと提案しています。特に「愛すること」と「責任」を学ぶことは、子どもが一生を豊かに生きるためには欠かせない生きる力の両輪です。ここでは、どのように子どもはそれらを学ぶかをお伝えしながら、自己肯定感の大切さを確認していきましょう。

全ての土台になる自己肯定感

子どもの心が最初に学ぶのが「愛すること」です。それは愛されることによって子どもの中に育ちます。おなかをすかして泣けば、誰かがやってきて空腹を満たしてくれる。おむつが濡れて気持ち悪いと泣けば、誰かがやってきておむつを替えてくれる。抱いてほしいとむずがれば誰かがやってきてあやしてくれる。その時、赤ちゃんが学ぶのは、求めれば自分の望みは叶えられるということです。それは、一人の人間の「世界に対する信頼」です。父親も母親も、可愛い守りたいという思いで、子どもに愛の手を差し伸べます。赤ちゃんは、親の笑顔と自分の心地よさを体験し、自分は愛される存在であることを学んでいきます。それが自己肯定感の基本です。これ以降、子どもは大切にされる中で、自分を愛することを学びます。豊かな人生の始まりです。

自分の欲求を自分で満たすことを学ぶ

一歳を過ぎるころから、その様子は少し変わってきます。子どもが大きくなるにつれて、親は子どもの欲求を全て引き受けず、親も子どもに求めるようになるのです。「待っててね」「投げちゃだめだよ」「動かないで」と子どもの欲求と親の都合がぶつかり合います。イヤイヤ期です。この時期も親は、自分の都合を一方的に押し付けるのではなく、子どもの欲求を認め受け入れながら、子どもに色々なことを教えます。いわゆる「しつけ」です。しつけと虐待は紙一重、と言われますが、あまりにも親の都合が優先されるとそれは虐待となり、自己肯定感に危機にさらされ、子どもは生きることは辛いものだ学びます。三歳を過ぎるころには子どもは責任を学び始めています。責任は英語でRESPONSIBILITY。これはふたつの言葉でできていて、RESPONSE（反応）とABILITY（能力）、つまり責任とは目の前の出来事に前向きに反応する能力のことを言います。お菓子の小袋を受け取ると、袋を自分で開けて食べ始めます。つまり、食べたかったら、袋を開ける。誰かと遊びたかったら、「あそぼ！」と言う、のどが乾いたら、「お水ください」という。自分の欲求を自分で満たし始めるのです。これが責任の第一歩です。自己肯定感を体験している子は自分の欲求を満たすことに積極的です。責任は子どもの中では、「できる」という感覚、有能感として育っていきます。ですから、子どもの有能感を育てたければ、過剰に干渉せず、子どもが

自分でできるように見守ることです。小学校に上がるころには、自己肯定感と有能感を両輪として、子どものやる気と自信が育っていきます。



親が試される思春期

思春期は特に重要な時期です。このころ子どもは親に反抗を繰り返します。思春期の子どもに手を焼く親は多いでしょう。愛情で包み込むどころか、顔も見たくないという親もいるくらいです。しかしこの時期子どもは、親に与えられた人生から、自分自身の人生に乗り出そうとしています。だから過剰な干渉を嫌がるのです。反抗し、干渉を避けながらも、親からの自己肯定感への刺激が一番必要な時期なのかもしれません。「手を放しても、目は離さず」とはよく言ったものです。どんなに反抗されようとその時期を温かく見守り、子どもの自己肯定感への刺激を続けることが親の役割であり、チャレンジではないでしょうか。

「そのままの君が好きだよ」と。

すがはら ゆうこ

代表理事 菅原 裕子



NPO法人ハートフルコミュニケーション

人材開発コンサルタント。

1995年、企業の人育てと自分自身の子育てという2つの「能力開発」の現場での体験をもとに、子どもが自分らしく生きることを援助したい大人のためのプログラム「ハートフルコミュニケーション」を開発。

2006年NPOを設立。各地の学校やPTA、地方自治体の講演やワークショップでこのプログラムを実施し、好評を得る。主な著書「コーチングの技術」(2003年講談社現代新書)、「子どもの心のコーチング」(2007年PHP文庫)

<http://www.heartful-com.org/>



親の役割は子どもの自己肯定感を刺激すること

自己肯定感を体験しながら生きていく子は、「自分は価値のある存在」という感覚に基づいて考え、行動します。そして有能感が様々な結果を見せてくれます。ところが自己肯定感を体験できないと、人は自分に自信がなく、考え方は否定的で、行動に移す勇気が持てません。したがって、なかなか望む結果を生み出せないのです。子どもの幸せな自立を目指して、私たち親にできることは、まず彼らを愛情で包み込むことです。わがままを言う、言うことを聞かない、学習に積極的でない、だらしがない、など、親が何とかしてほしいと思うたくさんのお困りごとがあると思います。それを何とかしようと子どもを追い立てる前に、「君が好きだよ」を伝えるようにメッセージすることです。肯定された子どもはその時、自分のすべきことに向かえます。子どもの中の自己肯定感が刺激されるのです。

1人1台の端末は令和の学びの「スタンダード」

「GIGAスクール構想」とは、文部科学省が令和元年12月に提示した、子供たち1人につき1台のタブレット端末（ICT端末）が使えるようにすることによって、一人ひとりに合わせた学習ができるようになることを目指すものです。西宮市では、令和3年3月に1人1台のタブレット端末を配備し、授業や特別活動など様々な学校生活の場面で活用を始めています。また、学級閉鎖時には、家庭と学校とをオンラインでつなぎ、子どもたちと先生とのコミュニケーションや勉強を続けることができるようになりました。

GIGAスクール構想でタブレット端末の活用を進めるために、子どもたちや保護者、教員に対してどのような取り組みをしていくかについて、「GIGAスクール・セカンドパッケージ」を公表しております。また、当市のGIGAスクール構想に基づいた教育の情報化の考え方については、西宮市ホームページ内「西宮が目指す教育の情報化」（ページ番号：96234209）、および特設サイト「西宮市のGIGAスクール構想 教育の情報化を目指して」（<http://kusunoki.nishi.or.jp/school/joho/>）を開設しておりますので、こちらをご覧ください。（教育研修課）



思いやりのある西宮っ子を育てる

5つの実践目標 リレーコラム

平成23年に西宮市家庭教育振興市民会議が新たに提唱した家庭教育の「5つの実践目標」をテーマとして、家庭教育振興市民会議の委員や家庭教育関係者などに自身の体験や思いを投稿していただくリレーコラム。
今号は、5つの実践目標の中から「声かけよう おはよう ありがとう ごめんなさい」をテーマに、「西宮市立瓦林小学校 校長 北井 良」さんにお話しいただきました。

「5つの実践目標」

- ・育てよう 優しい心と がんばる力
- ・声かけよう おはよう ありがとう ごめんなさい
- ・見守ろう よその子 我が子 区別なく
- ・習慣づけよう 早寝 早起き 朝ごはん
- ・外に出よう 元気に遊んで 友だちいっぱい

あいさつでつながる

本校では学校・家庭・地域が連携し、どんな子供に育てていくのかについて、教育連携協議会（現在は学校運営協議会）で熟議を重ね、「育てよう！たくましい心と身体、伝える力」というスローガンを掲げ、達成するための提言を令和元年度にまとめました。その中でも特にあいさつでつながることの重要性を取り上げ、教育活動の中核に位置づけています。具体的には、職員の会議や朝会、児童会活動や学校だよりなど、あらゆる機会を通じて発信しています。

毎朝、校門で登校してきた子供たちとあいさつをしていると、元気にあいさつをしてくれる子、はずかしそうに会釈する子、日によってはあいさつが返ってこない子もいます。

子供と親しくなってくると、その日の様子が顔の表情から伝わってきます。「おはようございます」の声を聞くと、さらにその子供の様子がわかることもあります。

ます。

普段と少し違うと感じた時には、「大丈夫？」と声をかけたり、担任の先生に様子を伝えたりしています。もちろん、元気なあいさつや自分から進んであいさつができた子にも、「ありがとう」という言葉をかけるようにしています。

自分では気付かないのですが、仕事の関係などで気になることがあると、私のあいさつがかたちだけになってしまうことがあるようです。そんな時にも元気なあいさつをしてくれたり、話かけてくれたりする子供がいます。子供たちも私のあいさつから様子を感じてくれているようで、とてもうれしく思います。

日々時間に追われてかたちだけになりがちなあいさつですが、今一度子供の目を見て、あいさつをする時間を設けてみてはいかがでしょうか。

きたい
北井

りょう
良

西宮市立瓦林小学校 校長



西宮市立図書館から本の紹介

●『ネット・SNSの危険から子どもを守れ！』

PCやスマホが普及し、インターネットがさらに子供たちの身近なものになっています。日常生活を豊かにしてくれる反面、広告詐欺やネットいじめなど、様々なリスクも存在します。

本書ではインターネットやSNSの基本からトラブル事例と解決方法、家庭で決めておきたいルールや注意点が解説されています。インターネットとどう付き合うのか、家庭で話し合うきっかけにしてみたいかがでしょうか。

●『「自己肯定感」を高めて自分を大切にしよう』

この本では、自己肯定感が低くなりがちな思春期特有の悩みに答えています。「友だちが別の人と仲良くしていると苦しい」という悩みに著者は、自分の心から目をそらすことが必要だと言います。その上で1人の友だちに依存せず、多くの人と緩やかにつながるよう勧めています。

その他にも心のバランスを上手に保つヒントが多く書かれてあり、中高生だけではなく保護者の方にも読んでいただきたい1冊です。



『ネット・SNS
の危険から子
どもを守れ！』

原早苗／編著
ぎょうせい
2021年



『「自己肯定感」
を高めて自分
を大切にしよう』

古荘純一／著
PHP研究所
2021年